

年間第三主日

2011.1.23 カトリック高円寺教会

マタイ 4 : 12~23

イエスは、宣教活動の早い段階で二つのことをしています。一つ目は、弟子を選ぶこと。もう一つは病人をいやすことでした。今日は、その2点について考えます。

イエスは、神の国、天の国を自分だけで実現しようとは考えてはいませんでした。もし、自分の力だけで達成しようとしたら、それは神の側から一方的に与えることになります。ですから、イエスは初めから人間に協力を求めます。弱くて限界のある人間、私たちを用いて、私たちの協力を得て神の国を実現しようと考えました。それでは、どんな人が選ばれたかという、今日の福音では、ペトロやアンデレ、ヤコブやヨハネ・・・みな漁師に声が掛りました。生活するために毎日まじめに働く人たちでした。イエスから呼ばれる、召出し、という特別な才能がある人に限られていると思いやすいかもしれませんが、決してそうではないことが分かります。神父やシスターにしても、活動する畑が特別なだけです。イエスはすべての人に自分の協力者になってくれるように呼び掛け、召し出しています。洗礼を受けた一人一人に期待をこめて弟子として働いてくれることを願っています。ただ、持っている才能、活動する範囲がそれぞれです。何を期待して、私たちを弟子にされたのか、祈りの中で見つめてみましょう。とりたてて特徴もないように思えても、イエスは特別な使命を与えたくて私たちを弟子に選んでいるので、それは何なのか時々考えてみましょう。

二つ目は、一点目とも関係があるのですが、イエスがおびただしい数の病人をいやされたことです。洗礼者ヨハネは、悔い改めるようにと勧めましたが、病人は癒さなかった。それに対して、イエスは、宣教の初めから、相当の数の病人を癒しました。病人の癒しは、神の国がもう来ていることの動かぬ証拠でした。

司祭に叙階されて今日で4カ月。私も、何名かの体の病気、心の病気を抱えた方から癒しを頼まれました。けれども、なかなかイエスのように癒しには至らない。病気が治れば、本人にとっても周囲の人にとっても、神の国が来たことがすぐに実感できるのに、ともどかしく感じる場合があります。私は、助祭になってから「とりなしノート」というものをつけています。祈りを頼まれると、その日付と内容、今願っていることを書き込むようにしています。その人と会ったり、メールで状況を知ると書き加えるようにしています。具体的方法は『目からウロコシリーズ』の「とりなしの祈り」（来住英俊著、女子パウロ会、2002年、750円＋税）に書かれています。「天使の森」にも置いてありますから、よろしかったらぜ

ひ読んで下さい。その「とりなしノート」を読み直していると、少しずつですがその人の中に、神様が働いていることに気付かされます。希望に向けて前進していることが分かります。場合によっては、ご本人の病気そのものは良くなっていないくても、以前ほどは病気に失望しなくなったり、前向きに病気を捉えようと変化していることを感じ取れます。あまり目に見える変化がないな？無駄かな？と思えた「とりなしの祈り」に、確かな意味があることを確認できます。そのことは、小さなところで神の国が実現していることとも言えます。

私たちは、イエスの弟子ではあっても、なかなかイエスのように直接その人を癒せません。時々、そのことでがっくりきます。でもイエスは、直接癒せないことを承知で、私たちを弟子に選んでいます。病人や苦しむ人と出会わせています。だから、私たちは、がっかりする必要はない。癒しを求めて祈って関わり続けるようにと、イエスはわたしたちを弟子に召出しています。私たちは、どうしてもすぐに結果を求めてしまいますが、イエスの計画はもっと長いスパンで考えているのでしょ

う。私たちが人生の中で、出会う病人は、数十人でしょう。その出会う人たち一人一人に、イエスの弟子として関わる。イエスの癒しの業が実現するようにと願う。それが、現代の私たちが、与えられた場で「人間をとる漁師になる」ことではないでしょうか？

イエズス会司祭 柴田 潔